

## 審査の結果の要旨

氏名 武井 誠

論文題目 境界空間としてのピロティに関する研究

本論文は、ル・コルビュジエとピエーヌ・ジャンヌレによる「新しい建築の5つの要点」において近代建築の五原則の一つとして提唱され、近代以降に世界中で数多く作られてきたピロティについて、建築に関わる様々な関係を媒介し豊かな関係性を生み出す「境界空間」として捉え直し、ピロティを持つ近代建築の分析を通して、境界空間としてのピロティの空間的特性を明らかにするとともに、ピロティの新たな概念的枠組みを構築する。そしてこの枠組みを通して得られるピロティ空間の展開として新たな境界空間の建築手法を発見的に提示し著者の実作を通して実践的に検証することを目的としている。

本論文は、序章、1～4章、結章および付録から構成される。

序章では、研究の背景・目的としてピロティの意義や課題を示している。そして、関連する既往研究をまとめ本論文の位置付けを明確にするるとともに、分析対象の選定および論文の構成について説明している。

1章では、ピロティという建築手法を現代社会において捉え直す視点として特に本研究で焦点をあてる「境界空間」について、「中間領域」「他者との接点」「浮遊」「プラットフォーム」といった4つの概念的枠組みを挙げ、「私と公」「人工と自然」「内と外」「建築と都市」といった多様な関係を媒介し、自由な行為、偶発的な出来事を生み出すものとして定義したうえで境界空間としてピロティを捉える意義を説明している。

2章では、ル・コルビュジエが構想したピロティについて、実現した建築を通して特性を考察し、さらにピロティが世界各国に広まる過程と、日本におけるモダンムーブメントの中でのピロティに対する評価を検証している。また、都市像の提案に見られるピロティの外縁としての建築を分析し、法律上、構造上のピロティの位置付けも確認することで、広い観点からピロティの歴史的意義を提示している。

3章では、1926年から1980年までの55年間に竣工した日本国内の95件と、海外の31件、計126件の建築を対象にピロティについてのデータベースを構築し、このデータベースを対象として、ピロティ空間のプロポーシオンや天井高さ、床・柱・天井の断面形状、素

材や仕上げ、家具の設えなどについて各事例を分析することで、大きな傾向を読み取りながら、要求された機能に必ずしも制約されない境界空間のあり方に関わるピロティ空間の建築的操作を確認し、それに対する設計者の意図を明らかにしている。また、ピロティ空間と外部からのアプローチとの関係性およびピロティ空間と内部空間との関係性の視点からも各事例を整理することで、境界空間としてのピロティ空間の役割や位置付けについて提示している。

さらに、これらの分析結果に対して 1 章で構築した概念的枠組みを通して考察することで、境界空間としてのピロティの可能性について①大地の形状を活かす②ピロティで敷地境界をつくる③プロポーションの逸脱④ピロティに穴を開ける⑤身体性を誘発する肌理⑥連続する地面という 6 つの特性を発見的に提言している。

4 章では、3 章で導き出された境界空間としてのピロティの特性から、著者の具体的な建築の設計を改めて見直し、設計プロセスや竣工した建築そのものの分析を通して、豊かな空間体験と周辺との多様な関係性を生み出す「境界空間」の今後の可能性について①内部空間の自然環境への浸透②開放を象徴するファサード③人々が集う空間の設え④私と公が共存する空間⑤内部と外部が近くなる境界⑥まちと建築がつながる多様な場を提示し、ピロティの展開によって新しい開かれた建築を作る手法を提案している。

結章では、本論各章について要約し、得られた知見について整理しつつ、境界空間およびピロティに対する今後の研究の展開を示している。

以上のように本論文は、モダニズムにおけるピロティの意義を確認した上で、境界空間の概念を導入し、モダニズム期のピロティを含む建築の緻密な分析によって、従来の機能主義的な視点にとどまらず現代社会の公共性に応えるピロティの新たな概念的枠組みを提示している点で社会的意義の高い研究である。また、境界空間の可能性について実践的な検証を行うことで新しい建築の設計手法に大きく寄与したと言える。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。